

---

---

# アジ歴の実績と今後の展望

アジア歴史資料センター長

平野 健一郎 ひらの・けんいちろう

---

---

## はじめに

国際公文書館会議東アジア地域支部第10回総会の開催に対して、アジア歴史資料センターを代表して、お祝いを申し上げます。私は、アジア歴史資料センターのセンター長をしております平野健一郎です。

皆様、アジア歴史資料センターをご存知でしょうか。「アジア歴史資料センター」-略称「アジ歴」-は日本の国立公文書館の一組織ですが、特別な設立経緯を持って10年前に公文書館に加えていただいた小さな組織です。EASTICA 総会のセッション3として、アジ歴をご紹介するプレゼンテーションの機会を設けていただきましたことに感謝申し上げます。

## 1. アジ歴の成り立ち

アジ歴のご紹介として、アジ歴が国立公文書館に特別に加えていただくことになりました経緯を簡単に申し上げます。1994年8月、日本の時の内閣総理大臣、村山富市氏が、次の年、すなわち1995年の8月15日が日本の第2次世界大戦終戦の50年目に当たることを念頭に、「平和友好交流計画」に関する談話を発表しました。その「平和友好交流計画」の第一は、「過去の歴史を直視するため、歴史図書・資料の収集、研究者に対する支援等を行う歴史研究支援事業」を行うこととされ、その計画の中で、「かねてからその必要性が指摘されているアジア歴史資料センターの設立についても検討していきたい」と述べられました。すなわち、アジア歴史資料センターは、1945年8月15日に終わった、日本の、アジア近隣諸国との戦争

の歴史を直視するための歴史支援事業として提案されたものです。

総理の提案後、内閣外政審議室や有識者会議によるセンター設立構想の検討が行われ、1999年11月30日にアジ歴の開設が閣議で決定されました。閣議決定までに約5年かかりました。さらに2年間の準備期間を要して、2001年11月30日、アジ歴はようやくスタートいたしました。したがって、アジ歴は本年11月30日に設立10周年を迎えます。アジ歴の開設に困難がともなったのは、アジ歴に与えられた使命である「過去の歴史を直視する」行為が微妙であり、困難な課題であるからにはかなりません。日本の国内にも強い反対がありました。加えて、センターをどのような組織にするか、どのように資料を収集し、どのように利用に供するか、などについても克服しなければならない課題が山積でした。しかし、それらの困難と課題を乗り越えてアジア歴史資料センターを設立したという事実は、日本の国民と政府が、日本とアジア近隣諸国との間の過去の歴史を直視する責任をないがしろにするものではないことを示しています。その意味で、アジア歴史資料センターは日本国民と政府の「国際公約」そのものです。組織としてのアジ歴は、内閣府の管轄下、国立公文書館に置かれることになりましたが、「アジア歴史資料センター」として特別の位置に置かれていることには重要な意味があるをご理解いただきたいと思います。

アジ歴の職務は、内閣府、国立公文書館に加えて、外務省、文部科学省から派遣されている職員によって執行されています。アジ歴が収集する資料は「アジア歴史資料」ですが、2001年の閣議決

定は「アジア歴史資料」を「近現代における我が国とアジア近隣諸国等との関係に関わる歴史資料として重要な我が国の公文書その他の記録」と定義しました。アジア歴史資料をデジタル化して、広く国内外に公開することがアジ歴の使命です。実際には、アジ歴は過去10年間、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センターの3館が所蔵する、幕末から1945年8月15日までの時期の歴史的公文書、すなわちアジア歴史資料を3館から受け入れて、データベースを作り、インターネットを通じて公開してきました。利用者は、自分のコンピューターを使って、アジ歴のホームページを通じてアジア歴史資料に自由にアクセスすることができます。アジ歴のデータはすべてオリジナルな歴史的公文書の画像データです。すなわち、アジ歴は「いつでも、どこでも、誰もが、無料で」、真正性のある近代日本のアジア歴史資料を見ることができるようになりました。初年度には約225万画像を公開しましたが、10年目の本年度末には、合計約2,500万画像を公開することになります。

## 2. アジ歴のこれまで

この10年間でアジ歴は日本最大の、あるいはアジアでも最大のデジタル・アーカイブズに成長しました。単に量的に大きいだけでなく、質的にも優れたデジタル・アーカイブズになっていると自負しております。すなわち、アジ歴は国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センターの3つの館から電子化された歴史公文書を提供されて、オンラインに乗せるだけではありません。そうする前に、まず目録を整備し、一つ一つの文書を整理し、アジ歴独自のレファレンス・コード・ナンバーを与えます。次に、すべての文書の先頭300文字をテキスト化します。先頭300文字のテキスト化もアジ歴独自の工夫です。この工夫によって、アジ歴のデータベースの利用価値は飛躍的に高まりました。全文書の先頭300文字と検索用辞書を組み合わせることによって、全文書に対するキーワード検索が可能になりま

す。もちろん、全文書の全文をテキスト化すれば完全な検索ができるはずですが、対象は膨大な量になり、間違いのないテキスト化をするのも難しく、全文テキスト化は不可能です。アジ歴が調べたところ、先頭300文字でその文書のキーワードをほぼすべて拾うことができます。また、利用者は、読み間違いが含まれているかもしれないテキスト化されたデータではなく、オリジナル文書の画像を見ますから、歴史資料の真正性も相当程度保証されます。アジ歴データベースでキーワード検索が可能になった結果、3つの文書館の文書の間での横断検索が飛躍的に行えるようになりました。特に日本の地方在住の利用者、日本国外の利用者から非常に喜ばれています。アジ歴は、先頭300文字のテキスト化と検索用辞書によるキーワード検索を、実用性と合理性のある文書利用の方法として他の文書館にもお勧めしたいと思っております。アジ歴は検索用の辞書の改善にも日々取り組んでおります。

アジ歴のデータベース検索は、キーワード検索とレファレンス・コード検索のほかに、50音順検索と階層検索でも行えるようにしています。階層検索は、資料の原本を所蔵している文書館における文書の配置に従った文書検索を可能にしますので、専門の歴史研究者が所蔵館の書架で史料を網羅的に探索する作業に匹敵する作業をデスクトップ上で行うことを可能にします。

アジ歴のデータベースの利用者は、大きく、専門的な歴史研究者と一般の利用者とに分かれます。一般の利用者には、一般社会の中の歴史に関心を持つ人々と、学校で歴史を学ぶ青少年たちとその先生方が含まれます。アジ歴は、閣議決定によって、一般の人々の歴史への関心を深め、そうすることによってアジア近隣諸国との間の相互理解を深めることをも求められています。その使命を達成するために、アジ歴は、インターネット特別展、特集、アジ歴トピックス、アジ歴スペシャル・コーナーなどの特別企画をトップページ上に公開しています。これまでに掲載したインターネット特別展は、日露戦争特別展ⅠおよびⅡ、公

文書に見る岩倉使節団、公文書に見る日米交渉、『写真週報』にみる昭和の世相、条約と御署名原本に見る近代日本史です。特集としては、今年6月に「震災と復興」を公開しました。この特集については、このあと、アジ歴研究員から少し詳しくご紹介いたします。

アジ歴データベースの利用者が海外にもいらっしゃることは申し上げるまでもありません。アジ歴のみならず、日本の国民、政府が外国の方々にアジ歴をたくさん利用していただくことを望んでおります。アジ歴のホームページのトップページには英語、中国語、韓国語のページがあります。目録データ（先頭300字を除く）を英訳して、キーワード検索を相当程度まで英語で行うことを可能にしています。また、アジ歴の活動を随時お知らせする「アジ歴ニュースレター」には英語版があります。しかし、アジ歴のデータ、すなわち歴史文書そのものはオリジナルの日本語文書がほとんどですので、それを外国で活用できるのは日本研究の専門家に限られることは事実です。

アジ歴のこれまでをまとめますと、アジ歴の使命の第一はデータベースの構築です。アジ歴はこれまでの10年間で3,000万近い画像データをインターネット上に公開してきました。データベースの構築に相当の成果を挙げてきたといえると思います。歴史研究と歴史理解にかつてなかった貢献をしてきたともいえると思います。しかし、そのデータは国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センターの3館が所蔵するものにほぼ限られております。また、時期的には、幕末から1945年8月15日までの時期の歴史的公文書に限られてきました。データを提供する機関の数についても、資料の期間についても、アジ歴が提供する歴史資料がさらに増えることを歴史研究者だけでなく、一般の利用者も望んでいるに違いありません。戦前の大蔵省や植民地機関の文書、また、1945年8月15日以後の時期における日本とアジア近隣諸国との関係に関する文書など、アジ歴の便利なデータベースで続けて歴史資料を見たいと願っている人々が多いことをひしひしと感じ

ております。さらに豊かなデータベースの構築に向かって、これからのアジ歴は何をすべきか。その点についてアジ歴が何を考えているかを、残された時間で簡単に申し上げます。

### 3. これからのアジ歴

この10年間、すなわちアジ歴の最初の10年間に、アジ歴を取り巻く環境は大きく変化しました。特に重要な変化は二つです。第一の変化は世界におけるデジタル化の急速な進展です。第二の変化は日本で今年4月から施行されている「公文書等の管理に関する法律」です。「公文書管理法」施行の中心になっているのが国立公文書館であることはいうまでもありませんが、アジ歴はその変化の影響を受けています。こうした変化の影響を積極的に受け止めて行くことから、今後のアジ歴の活動が広がって行くことと思います。

コンピューターの発達によって、データのデジタル化が目覚ましい勢いで進んできました。アジ歴は設立当初から文書をデジタル化して提供してきましたが、最初の頃は、「データベース」や「デジタル・アーカイブズ」ということばは、多くの人に耳慣れないことばでした。それが今や、「データベース」は日常語になり、多くの図書館、資料館、博物館などが「デジタル・アーカイブズ」を併設しようとしています。日本では、最近、あちこちで行政文書の逸失が起り、今年は特に3.11で、災害による紙媒体文書の消失・破損に関心が集まりました。その結果、「データベース」、「デジタル・アーカイブズ」への関心が高まっています。なによりも、事務処理と広報と、そして研究にとって、デジタル化されたデータの利便性は甚大で、誰もが一度その効用を知れば、二度とその使用をやめることはできないでしょう。アジ歴にとって、デジタル化の波はプラスに作用し続けると思われます。歴史資料をデジタル化して提供することに対して、最初の頃は否定的な反応もありましたが、画像データとして提供する「アジ歴方式」が理解されるようになり、今では、歴史研究者の中にもそのようなアレルギー反応は見られな

くなりました。アジ歴は、これからもデータベースの構築を続け、歴史研究と歴史理解に需要の多い資料を正確に提供したいと思います。デジタル化の流れによって、「デジタル・アーカイブズ」の最先端に押し出された形のアジ歴ですが、これからは積極的にその流れをリードして行きたいと思っています。

日本では、今年から公文書管理法が施行されたことにより、二つの機関を除くすべての中央省庁の歴史的公文書が国立公文書館に集中されることとなります。今後は、それらの公文書のうち、国立公文書館が「アジア歴史資料」と指定する文書は、アジ歴を通してデジタル公開されることになるでしょう。そうなれば、アジ歴データベースにこれまでの3館以外の機関の文書も加えてほしい、という利用者の希望がかなえられることになります。今「二つの機関を除いて」と申しましたが、その二つの機関とは、外務省外交史料館と宮内庁宮内公文書館です。この二つは、今回の公文書管理法によってそれぞれ独自の国立公文書館等になりましたので、その所蔵資料が国立公文書館に移管されることはありません。したがって、そ

れらが国立公文書館を通してアジ歴に提供される可能性もありません。しかし、この二つの機関の所蔵資料には「アジア歴史資料」が多く含まれていますから、アジ歴は、それら資料のデータベース化に際しては、二つの機関と有機的、合理的な提携を実現させなければならないと思います。

## おわりに

---

最後に、アジア各国の公文書館を代表して EASTICA の総会にお集まりの皆様、アジ歴センター長からご提案したいことがあります。アジ歴の利用者がアジ歴に求めていることの一つに、アジ歴の歴史資料データベースをアジア各国の歴史資料データベースと連携させてほしい、という要望があります。皆様方のデータベースとアジ歴のデータベースをリンクさせることができれば、今よりもはるかに大きな規模で横断検索が可能になり、歴史研究と歴史理解が国際的に大きく飛躍することになるでしょう。この EASTICA 総会を契機として、データベース国際ネットワークを形成する歩みが始まることを希望しまして、私のご挨拶といたします。

---

原 題：JACAR's Achievements and Future Plans

報告者：Kenichiro Hirano, Director-General, Japan Center for Asian Historical Records